

時事新報

時事新報

英國と日本

我輩は過日の紙上に英國の新聞紙が今回の日清戦争に付き自國の利害を思ふの心より支那の勝利を希望する云ふは甚だ解す可らざる申條にして彼等は遠からず其説を續けて事ろ日本の勝利を希望するに至る可しとの大筋を述べたるが果して我輩の豫想に違はず最近の倫敦通信に據ればタイムズを始めとして英國にて最も有力なる新聞紙は何れも我日本兵が平壤と云ひ黃海と云ひ僅々數日を隔てし海に陸に何れ劣らぬ花々しき大勝利を得たりと開て一驚を喫し茲に始めて支那の願ひに足らず又日本の侮る可らざるを發明したるもの如く假らば是れまでの論調を改めて我海陸軍の功名を稱賛し日本を英國に取りては自然の同盟國なりと唱ふる者さへあるに至れりと云ふ抑も支那と比較して日本の遙に有爲有力なるは多年來分り切つたる事實なるにも拘はらず英國人が徒に老國の版圖人口の廣大なるに眼を奪はれ東洋に於て我同盟たる可き國は支那を捨て外になしなどし言信して以て今日に至り偶々戦争の結果を問て始めて夢の覺れたるが如くに英清同盟の願ひに足らざるを發見したるは如何にも迂闊千萬の次第なれども西洋の辭にも過と改るに暇なきに過るの時なしと云へば英人の迂闊も左迄深く答るに足らざるものとすして彼等自今英國が急支那を離れて日本と提携するの必ならんには我輩は特に彼國人に向て注意を促す所の一事あり即ち務めて我國に對して好意を示し以て國民の熱心備用を得るべき是れなり凡そ國と國と同盟して親善相救はんとするには唯兩國の政府が互に條約したるのみにては未だ以て足れりせず其政府の後援を爲りて外交上の政略方針を支持する所の人民にして互に親善の念を去り相共に親み交るの意なきに於ては到底眞實有効の同盟は望む可らず如何と云へば國家の安危に關する重大問題に就て一國政府の運動は専ら人民の意志に因て定まるる自然の順序なればなり殊に日本の如きは既に國會の設けもありて政府の一舉一動、都て皆人民の意志に従て行はるのみならず我日本國人は一種の民にして國中の貴賤富貴を問はず若男女に論なく固有の愛國心に富み其國を思ふの熱情に至ては殆んど世界無比の熱心なる大衆なれば今この國と相結んで同盟の實を擧げんとするに國民の感情を害するの恐ある事は一切これを慎む可きは勿論、議會の生ずる毎に有らゆる方便を盡して其熱心を求め其信用を得るの事を爲すも最も所要なる可し然るに近來英國の我國に對する感情を見るに固より我れに對して敵意を示すものに非ずと雖も去りて又特別に我れを厚く愛するもの如何にしても認む可らざるが如し例へば日本軍の始めて京城に入るや同黨駐英英國總領事ガードナー氏が我軍兵艦を視して兵士に誰何せられ在に一場の紛争を生じたる時に當り倫敦の諸新聞紙は同領

明治廿七年十月廿六日 (金曜日)
 舊曆甲午九月廿八日 (辛丑)
 本報創刊於光緒二十一年
 創刊時每份售錢十文
 現行每份售錢二十文
 每月售銀一元二角
 半年售銀六元
 全年售銀十二元
 (西曆一千八百九十四年)
 二九十九日

事の報告なりとて日本の兵士が同氏の細君に無禮を加へたりなき有らざるを慮るに或るに書き立てし日本人は亂暴猖獗に至らざるを國民なりと公言したり斯る虚報はガードナー氏の手より實に之を傳へたるものか又は倫敦新聞紙が風説に誤られて之を信したるものか我輩は之を知らずと雖も兎に角に此一事が日本人をして英國を愛するの念を起さしむるの原因たらざりしとは事實に争ふ可らず大で豐嶋の海戦に日本の軍艦が支那政府の運送船高麗號を沈没せしめたりとの報知倫敦に達するや數多の新聞紙は又々大に激昂し能く事實をも探究せずして漫に日本の「暴行」を非難し口を極めて我海軍を罵詈雑言したるは實に無禮千萬の舉動にして苟も日本人たる者は誰とて之を憤らざるものあらんや又此度以東洋艦隊の司令長官フレイマントル氏が日本軍艦の爲めに破壊されたる支那の廢艦廣乙號の乗組員を救助して之を本國に護送したるが如き若し果して事實ならば是れは明に國際法に戻りたる行爲にして英國の海軍司令長官は日清の戦争に就て支那に左袒する者なりと云はるるも辨解の辭はなかる可し思ふに英國にても政府の當路者を始めとし苟も東洋の事情に詳なる人々は目下の勢に照して日本と親密にするの甚だ大切なるを知り右等の事件を見開して心中竊に憂慮するならんや如何にせん支那と同盟する事は英國年來の政略として人に知られたるものなれば時勢の變遷に通ぜず東洋の現状を解せざる新聞記者并に軍務外交の官吏中には唯一圖に英清結託の舊政略を遵守し悉々たる事柄に就ても支那に味方して以て自家の本國に忠義を盡さんとするより斯る不都合の生ずるものとならん從前の行掛りよりして自から恕す可きの事情なきに非ざれども世間普通の人は決して此の如き情實の存するを知る者に非ざれば今日の事態にして永く續くと云は英國に對する日本人の感情は或は益々苦々しくなるの勢なきにあらざりては誠遺憾なりと云ふ可し蓋し英國政府が他國に卒先して我國と對等の條約を締結したるは日本人民の大に満足する所にして是れが爲め日英兩國の關係漸く温ならんとする此際當り豊々たる出來事の爲めに日本人の感情を損して猜疑の念を起さしむるは我輩英國の爲めに謀りて取らざる所なり

雜報

○清將左寶貴戰死の様
 平壤より走りて奉天府に歸りし清兵偵察者の始めて同地に着したるは九月二十五日にして軍教師の設立に於ける醫院は其後十月二日までに七人を引受けて治療し其れも平壤に向ふと云ふ彼等が語る所を聞くに平壤にて戰没せし左寶貴は始めに銃丸を受ければ衣服を引裂きて胸帯を施し何れ相續らず部下を指揮する内大砲一門の長なる兵學校の生徒某肩に銃丸を受け地上に倒るゝを見て左は直ちに其傍らに進み躬から其大砲を

指揮しつゝありしが固もなく銃丸胸に中りて倒れたり傍らに付從ふたる傳令使其外の從官等は其大砲を見るや馬に打乗せし三人に之を警護し陣所に退く内に左の息は絶へければ急ぎ土中に其死體を埋葬し終りて孰れも逃げ出んとすれば日本兵三方を圍みて容易に出る能はず漸く北方の備へなきを知り思ひくく逃走せり元來左寶貴は剛毅の大將なり始め牙山の未だ陥らざる時其援兵に赴ひくべき旨天津よりの電令に接せり左れど海路は既に塞りて安全に到着の見込みなきが故に陸路を取るもよし電報に接してより數日の後先づ部下の本隊を出立せしめ自分は夫れより三日後れ五百の騎兵を率ひて進發せり奉天府より鳳凰城に至る間は道路惡敷く尋常一日の行程は五十乃至六十清里なるに左は百清里づゝを走り日中僅かに晝食の時間を與ふるのみ終るや否や再び兵を雇り立て三日にして鳳凰城に着せり其後再び天津よりの電令により平壤を據守するもとなり糧食の困難をも物の數とせず急行該地に向ひしもの由同城陷落南、總提督葉志超は砲將を集め退陣せんよとを囑したるに左は大に怒り以ての外のみを云ふ人かな戦はずして退くの理あるべからず左の議ならば先づ大將を切て味方の陣を堅むべしと誓ひたれば葉は其勢ひに恐れ俄かに言を改め決して實際其心あるにあらざり只だ貴將等を試みん爲め設けたる言に過ぎずと謝したり後に奉天府へ其戰死の報の達するや平生知己の朋友は勿論その外知るも知らぬも皆之を悲み此人既に戰歿すれば奉天府の防禦も如何あらん危ふみ兵士の落膽は亦一層に陰かに退散の心を懐くものありと云ふ右は清人若くは其間に友人多き外人の云ふ所なれば兎に角に慮及したる清將の中にあつては有数の人物なるが如く其戰歿したるは武人の本分に背かざるものと云ふべし

倫敦タイムズの旅順口論

に云く其論頭に於て本誌、天津及び彼の距離を置きて北京を控えし直隸灣の口は旅順口と威海衛との間に於て凡そ百十里に至るまで狹まりたり是等の兩港は斯の如くして支那東北海岸の爲めに天然の地形上、軍略の要點たるが如し直隸灣に侵入する敵兵は兩港を横に見て之を後に覆し行かざる可らず凡俗の俗説に斯の如く天險の地位に置かれたる是等二點の要力なる軍港は支那に附近せる諸島の支配權を與ふるものなりと云へり然れども凡そ軍港なる者は其外面に於て艦隊の援助なきに於ては軍略上、更に價なきものにて旅順口及び威海衛の價は全く支那海軍艦隊の力量に由て定まるるものと云ふに蓋し觀の場所の近きに在りと云ふ一事は勝利の要素たるものと殆んど無なり否と云ふのみならず既に歴史に其例あるが如く之が爲めに兵の不活潑を來せしは毎度のものと云ふ我英國に於ける其道の人も氣着かざる程の不慮に具ふる用意を以て支那人が彼此心配したりしとも覺えず是を以て旅順口及び威海衛は唯定式を以て固められたるのみ北支那第一の海軍軍港たる旅順口は大きな海軍の頭脳に在り廣さ二百ヤード餘りの海峽より入込む可き此軍港の内には大なる艦隊を碇泊せしむるに足るほどの室なし然れども凡そ十四隻の大艦を容るるに過ぎず可き事なる漸く海軍は進歩されたり近來、増設されたりと云ふ大なる艦隊、許多の機銃及び石炭庫は旅順口の海軍軍港力を完成したるものなり軍に艦隊を碇泊せしむるには一見、先づ心安き場所なるが如しと雖も

SAFETY FUJINICRO